

たなカテゴリーとして設置された本学には、これまでの教育機関とは異なる多くのミッションが課せられているわけだが、本書で提案されている「言葉と衣服」の関係をアップデートすることによってファッションに新たな視座と論点を持ち込むこと——これこそが実は重要な使命であり、喫緊の課題なのかもしれない。

田中ひかる著 『生理用品の社会史』

角川書店、2019年刊
300頁、960円+税

国際ファッション専門職大学
河西瑛里子

「ちょっと生理用品、見てもいいかな」

久しぶりに会った従姉とお茶をした帰り際、たまたま立ち寄ったマルイで、2人でじっくり最新の生理用品を見ることになった。彼女にはもうすぐ10歳になる娘がいて、いつ生理が来てもおかしくない年頃。最近は使い捨てナプキンやタンポン以外にも、いろいろな商品が出ているから、どれがいいか、自分でいろいろ試しておきたいのだから。経血を吸収してくれるムーンショーツや繰り返し使える布ナプキン。そこには販売されていなかったが、膣内に挿入するシリコン製の月経カップというものもある。どれもそれなりにかわいく、「いろいろあるねー」と話が弾む。

本書を手にとったのは、それから数週間後のことだ。著者は生理用品や月経観について研究している歴史社会学者らしい。本書の構成はつぎの通りである。

第一章 ナプキンがなかった時代の経血処置
——植物から脱脂綿まで

第二章 生理用品の進化を阻んだ月経不浄視
——「血の穢れ」の歴史

第三章 生理用品が変えた月経観
——アンネナプキンの登場

第四章 今日の生理用品——ナプキンをめぐる
“イデオロギー”

第一章では、日本で生理用ナプキンが登場するまで、行われてきた経血処置について、時代を追って解説している。

女性が経血の処置をいつごろから始めたのかはわからない。しかし、縄文時代の遺跡から麻が出土していること、『魏志』倭人伝にも麻の使用について記載されていることから、当初は麻のような植物の葉を使用していたと考えられる。平安時代になると、大陸から絹が伝わる。貴族たちは絹を袋状に縫い合わせ、その中に真綿を入れたものをナプキンのように使っていた。江戸時代からは布だけではなく、紙も使われるようになった。

明治時代以降、経血処置について書かれた文献が増えてくる。当時の国家目標であった「富国強兵」のため、健康な兵士や労働者を生む「健康な母体」の育成が求められ、その流れで月経や月経時の行動に関し、医師たちの意見が求められたのだ。主な経血の処置法は、江戸時代と同様、禪のように布を縫い合わせた木綿製の「丁字帯」であったが、使用していた布や紙は不衛生だったようだ。ただし、働く女性の経血処置については等閑視されていた。

明治時代、大正時代にかけては、ゴム製や布製の「月経帯」が製品化されていく。ただし高価だったため、紙や布、脱脂綿を膣に詰めるタンポン式の処置法の方が一般的であった。月経帯の量産が始まるのは、昭和初期だ。女性たちの洋装化が進み、月経帯はベルト式からズロース式(ショーツ型)が一般的になっていく。太平洋戦争中は、脱脂綿が配給制となり、ぼろ布などを直接膣に詰めたりする処置が行われていた。

生理用品が長い間、改善されなかった1つの理由に、著者は月経回数を挙げている。

明治時代の女性は現代の女性より、初経年齢が2年遅く、閉経年齢は2年早かった。1人の女性が生んだ子供の数を明治時代は5人、現代は2人とすると、前者の生涯月経回数は50回程度だが、後者は455回となる。その他の理由として、月経禁忌が挙げられている。それを見ていくのが第二章である。

月経禁忌とは、経血を穢れているものとして、月経中の女性や月経のある身体を持つ女性そのものを禁忌（タブー）あるいは不浄とみなすことである。月経禁忌に伴う慣習は、最近まで世界各地にみられたし、今でもみられる地域もある。経血を不浄とみる慣習が根強く残っていたため、経血を処置する方法や用品について、人前で話すことは憚られ、隠すべきものとされてきた。このような月経禁忌が、快適な生理用品の発達を妨げてきた、と著者は繰り返し強調している。

第三章では、太平洋戦争後の生理用品、とくに現在の使い捨てナプキンの原型となる「アンネナプキン」の発売と普及の過程とその関係者が取り上げられている。

終戦後から1960年代に使い捨てナプキンが普及するまで、経血処置法の主流は脱脂綿を黒いゴム引きパンツ、つまり股の部分にゴムが貼ってある布製のショーツで押さえる方法だった。しかし、蒸れる、肌触りが悪く湿疹やかぶれを起こしやすい、脱脂綿が移動するため衣服を汚すことがある、水洗のトイレに脱脂綿を捨てられない、という問題があった。アメリカのコーテックスという製品も売り出されていた。これはパッド（紙綿）をテックス（ガーゼ）でつつみ、ベルトに吊るすものである。ゴム引きパンツと脱脂綿よりはるかに快適だったそうだが、大々的には販売されていなかった。

経血処置のあり方を大きく変えたのは、1961年に発売された、使い捨てのアンネナプキンである。この商品は専業主婦としての生活に飽き足らなくなり、発明サービスセンターを立ち上げていた坂井泰子（1934年～）

の発案だった。当時、普及し始めていた水洗トイレに経血処置に使用した脱脂綿を流してしまい、便器を詰まらせてしまうことが頻繁に生じていた。これを防ぐため、坂井は脱脂綿を使用しない経血処置法が必要だと考えた。また彼女はコーテックスを使用していたのだが、アメリカ人の体格に合わせて作られていたので、日本人に合った生理用品の必要性を実感していた。そこで夫と2人で会社を作ったのだ。

「アンネ」という名前は、『アンネの日記』の中でアンネが月経を「甘美な秘密」と表現し、肯定的に受け止めている記述に由来する。月経に明るいイメージを付与させようと試みたのだ。また「パッド」ではなく、アメリカ流の「ナプキン」を採用し、「アンネナプキン」と名付けられた。生理用品であることを意識させない洗練された菓子箱のような包装にし、ゴム引きパンツより履き心地の良い網目状のショーツも同時に発売した。1961年、販売が開始されると、飛ぶように売れ、売り切れが相次いだ。「アンネ」は月経や生理の代名詞となり、月経や生理のイメージを好転させた。

さて、最初期のアンネナプキンと現在の使い捨てナプキンの大きな違いは、水に流せるかどうかである。そもそも坂井は水洗トイレに詰まらない商品を目指し、開発した。しかしその後、追随した他社が販売した類似商品は水に流せなかったため、トイレを詰まらせる結果となった。また、水洗トイレが普及していない地方では、水に流せるかどうかはあまり重視されていなかった。やがて、水に流せない素材のナプキンが主流になり、今ではナプキンはトイレに流さないものとなっている。

アンネ社は売り上げ、資本金、社員数のいずれも急激に成長していったが、1971年、現ユニ・チャーム社に売上高を抜かれ、1993年、ライオンに吸収合併された。そのユニ・チャーム社の創業者の高原慶一郎

(1931～2018年)は建築資材を扱う会社を経営していたが、アンネナプキンを見て、アメリカの大型スーパーマーケットで堂々と販売されていたナプキンのことを思い出し、開発を始める。1963年から販売を始めると、ナプキンはすぐに社の中心事業となる。アメリカでの視察の経験を活かし、日本で登場し始めていた大型スーパーに商品を卸したことが大成功につながる。花王やP&Gも生理用品市場に参入し、競争が激化したことが製品の向上につながった。1978年には花王と第一衛材が、高吸収性ポリマーを応用したナプキンを発売し始め、使い捨てナプキンの性能はさらに向上した。

第四章では、使い捨てナプキンの抱える環境問題や、近年注目されている布ナプキンを取り上げる。そして生理用品をめぐる「イデオロギー」に触れ、女性と生理用品の関わり方について考える。

環境への負荷や素材による皮膚疾患を解消するとして、1990年代から注目されているのが布ナプキンである。使い捨てナプキンと似た形状だが、綿布が数枚重ねられ、やや分厚い。布ナプキンの使用は環境への配慮という位置づけを超えて、かぶれやかゆみ、月経痛の改善、月経期間の短縮、経血の質の変化など、さまざまな「効用」があると報告されている。使い捨てナプキンに用いられている高吸収性ポリマーは体を冷やすため、月経痛を引き起こすという主張もある。しかし、著者の調査によれば、布ナプキンに保温性があるという方が正しいし、布ナプキンの使用者からは動きづらさ、経血が漏れる、洗濯が面倒という否定的な感想ばかりが得られた。

布ナプキンを推奨する人々は、布ナプキンを使用すると、使い捨てナプキンの登場以前の女性たちのように月経に対して「ポジティブ」になれると説く傾向にある。しかし著者は、女性たちが月経期間をポジティブに過ごせるようになったのは、むしろ使い捨てナプキンの功績であると強調する。

さらに、布ナプキン推進派がよく指摘するのが、使用済みナプキンを「汚物」と呼ぶことである。このネーミングは女性に月経や経血を汚いものと認識させ、ポジティブな受容を阻んでいるというのだが、経血を汚いととらえる布ナプキン使用者もいるし、血液は感染症を媒介する可能性もあるため、汚物扱いの方がよいと著者は言う。そして、経血を不潔ととらえることと、月経という生理現象を不潔・不浄ととらえることは異なるとし、過去に経血や月経が不浄ととらえられてきたことへの反動として、経血や月経、生理用品に過剰な意味づけを行うことは、不適當だとする。

使い捨てナプキンは月経の存在をなくしてしまったという批判もあるが、著者によれば月経のときでも通常通り活動できることを望んでいたのは女性たちである。また、存在を隠されてきた月経を、女性に当たり前の生理現象だと示したのも、使い捨てナプキンに負うところが大きい。使い捨てナプキンのメーカーは月経を商品化しているという批判もあるが、著者は企業とはそもそも利潤を追求する組織で、納税により社会貢献しているし、取材したどのメーカーも真摯に開発を行っている指摘する。

繰り返し使えることは、確かに布ナプキンの利点だが、だからと言って使い捨てナプキンを不当に貶め、メーカーを批判することが女性たちに有益とはいえないと著者は強調する。そして、使い捨てナプキンと布ナプキン、それぞれの利点と欠点を理解し、大げさなイデオロギーを振り回さず、自らの状況に合わせて利用していくことを薦めている。

最後に、日本ではそれほど普及していない生理用品を紹介している。布ナプキン同様、環境に配慮しているとして注目されているのが、シリコン製の月経カップである。日本での普及率が低い理由として著者は、タンポン同様、膣内に装着することに対する抵抗を挙げている。その他、外子宮口に装着して経血

をためる、薄いゴム製の月経ディスク、月経開始と同時に子宮に管を通し、内膜をすべて吸い取る15分間月経法も紹介している。そして、日本で経血処置法が多様化しなかった理由として、再度、使い捨てナプキンの性能の良さを挙げている。

本書を読むまで、女性がどのように経血を処理してきたのかは、とくに考えたこともなかった。読み進めながら、女性が経血のことを気にせず、暮らせるようになったのは、ここ数十年のことだと知った。冒頭のように、外で気軽に生理用品について口に出せるようになったのも、月経観の変化が影響しているのだろう。ただし、布ナプキンについては、ごくたまに話題になるが、ドラッグストアで堂々と販売されている使い捨てナプキンについて会話の中で話題にしたことがない。私だけかもしれないが、布ナプキンより話題にしづらい気がする。それは、素材の違い以上に、社会における位置づけが異なっているからではないか。

最後の第四章の布ナプキンを推奨する人々の主張の分析について、やや違和感を持った理由も、おそらくそこにある。著者は、布ナプキン推進派の主張をいくつか取り上げ、メーカーへの取材も進めながら、科学的根拠を取り入れ、丁寧に批判している。その指摘は、科学的にはおそらくすべて正しい。著者は、布ナプキン推進派の人々の主張の誤りを正したいように読めるのだが、おそらくその批判は届かないだろう。なぜなら、布ナプキンとスピリチュアリティの関連性を等閑視しているからである。

本書の引用箇所を読む限り、使い捨てナプキンを「過剰」に批判し、布ナプキンを称賛する人々は、すべてではないだろうが、女性の身体や月経・妊娠・出産という女性特有の身体現象を神聖視するスピリチュアリティに、関心を持っていると考えられる。社会学者の橋迫瑞穂によれば、2000年代以降急速

に発達した「スピリチュアル市場」では、月経・妊娠・出産を聖化するコンテンツが人気で、人気のグッズの1つが布ナプキンである[橋迫2021: 17, 41, 58]。スピリチュアリティとは、教団や教義をもたず、個人で聖性や宗教的な体験を希求しつつも、ある程度、特徴的な世界観を共有する宗教的現象のことであり、その主張は必ずしも現代科学や現代医学に根拠を持つわけではなく、しばしば批判の対象になっている。

つまり、どちらも生理用品ではあるが、医薬部外品に分類されている使い捨てナプキンは異なり、布ナプキンはスピリチュアル市場の人気商品である。環境にやさしい生理用品として利用している人もいるだろうが、程度の差はあれ、スピリチュアルな観点から利用している人も少なくないと思われる。そのため、布ナプキンについて論じるためには、スピリチュアリティとの関連性に触れる必要があったのではないか。

ともあれ、使い捨てナプキンの開発が、女性たちの社会進出を支えてきたことは事実である。そのことを、経血処置法の歴史や月経観の変化も併せて、丁寧に分析している本書は、生理用品に親しんでいる大人の女性のみならず、大人の男性や、これから生理用品を使うようになる女兒や、その周りの男児たちにも、ぜひ読んでほしいと思った。

<参考文献>

橋迫瑞穂 2021『妊娠・出産をめぐるスピリチュアリティ』集英社。